



通水100周年の記念すべき年に、重要文化財の指定を受けた旧岩淵水門（通称：赤水門）

かわはく No.81

CONTENTS

開催報告：荒川放水路通水100周年記念展示

「東京をまもった人工水路と生きものたち」…………… 2

開催案内：蔵出しコーナー

「荒川放水路ゆかりの収蔵資料をピックアップしてみました」…… 3

開催案内：スロープ展「かわせみ河原とかわはくの鳥類」…………… 3

開催予告：春期企画展「麦の国さいたま」…………… 4

お知らせ：かわはくオリジナルグッズを販売しています…………… 5

お知らせ：学芸員および研究活動紹介コーナーを新設しました…………… 6

学芸員コラム：学会&巡検に参加してきました…………… 6

学芸員コラム：森玄黄斎作「蚕守護尊神」…………… 7

イベント情報コーナー 12・1・2・3月…………… 8



開催報告

荒川放水路通水100周年記念展示「東京をまもった人工水路と生きものたち」

開催期間：2024年9月21日（土）～12月1日（日）

展示概要

東京都内を流れる荒川最下流部は、水害から東京の街を守るために開削された人工の水路「荒川放水路」です。今年10月12日に迎えた荒川放水路通水100周年を記念して、本企画展では、放水路建設の経緯やその役割、放水路と共に整備された岩淵水門について紹介します。また、荒川河口の干潟や汽水域に生息するボラやスズキ、貝類や甲殻類のほか、放水路周辺の河川敷やヨシ原、都市河川でみられるさまざまな生きものたちを展示します。10月には関連イベントを開催しましたので、その様子をお伝えします。

関連イベント開催報告

□10月12日（土）高麗川河川敷クリーン作戦

荒川水系支流の高麗川河川敷（坂戸市多和目）にて、城西大学薬学部医療栄養学科の環境ボランティアサークル「高麗川かわガール」との共催で清掃イベントを行いました。コラボイベントとしては昨年に続き2回目ですが、「高麗川かわガール」は毎月清掃活動を行っています。当日は天気にも恵まれ、学生さんやスタッフも含めて22名での開催となりました。

ゴミ拾いだけでなく、河川敷の鳥類、昆虫、植物など自然観察をしながら多和目橋から多和目天神橋までの約1.5kmの区間を歩く



高麗川河川敷のトノサマバッタ

行程でしたが、あっという間に感じました。多和目橋付近では、河川敷の草原に生息するバッタ類などが観察できました。しかし一見、きれいに見える遊歩道でも、草むらの中から空き缶やペットボトルのゴミが見つかりました。こうしたポイ捨ては、少量のゴミであっても法律違反です。棄てられたゴミは更なるポイ捨てを助長させ、自然環境を悪化させます。昨年よりも空き缶やペットボトルのポイ捨ては多く、河川敷を利用する人々のマナーはまだだと感じました。多和目天

神橋付近では、欄干から落とされたようなオートバイが川底に沈んでいるのを発見するハプニングもありました。

□10月31日（木）あらかわ号乗船体験～通水100周年を迎えた荒川放水路を巡る～

国土交通省 荒川下流河川事務所のご協力のもと、巡視船「あらかわ号」の試乗体験イベントを開催しました。当日は、荒川知水資料館AMOAや、今年8月15日に重要文化財の指定を受けた旧岩淵水門（通称：赤水門）の解説付き見学に加え、普段は入室することができない、災害発生時に指令室として機能する「災害対策室」も特別に見学させていただきました。

また、あらかわ号の乗船中にも驚きのサプライズが…荒川と江東デルタ地帯（0m地帯）を流れる河川（運河）との水位差を調整し、船の航行を可能にする「荒川ロックゲート」を通過する際に、船尾のデッキに上がらせていただき、とても間近にロックゲートを見学することができました。

本当に、1日中、驚きと感動の連続…それだけではなく、時に猛威を振るう荒川の水害の恐ろしさや、荒川放水路や岩淵水門が果たした役割を改めて認識することができ、参加者の皆様にとっても充実した見学となったのではないかと思います。

最後に、今回ご協力をいただきました荒川下流河川事務所のスタッフの皆様、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



いざ、あらかわ号に乗船!!

（学芸グループ 藤田宏之・羽田武朗）



開催案内

蔵出しコーナー「荒川放水路ゆかりの収蔵資料をピックアップしてみました」

開催期間：2024年10月8日（火）～2025年2月2日（日）

今回の蔵出しコーナーは、秋期企画展との連動企画となっています。第2展示室では、今年で通水100周年を迎えた荒川放水路と、重要文化財の指定を受けた旧岩淵水門（通称：赤水門）の紹介をメインに行ったので、蔵出しコーナーでは企画展だけでは紹介しきれなかった、荒川放水路ゆかりの資料を展示することになりました。

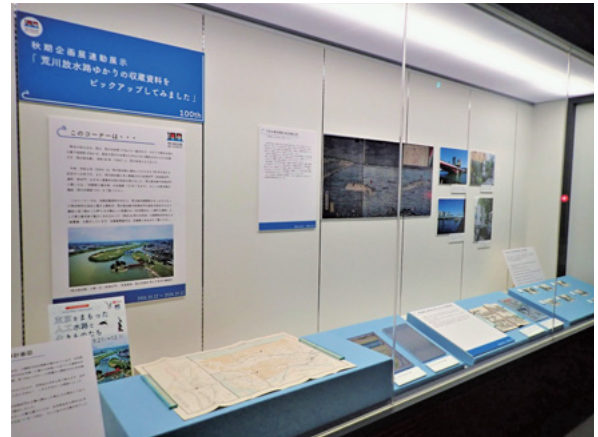
大きく取り上げたのが、明治時代に東京都内で発生した荒川（隅田川）の洪水にまつわる資料です。明治期に多発した洪水と明治43年（1910）の大水害が、荒川放水路開削のきっかけへとつながりました。

今現在、荒川流域で堤防が決壊するような洪水が発生した場合、想定される浸水深は深い所で10m近くに達します。しかし、当時の洪水は広大な範囲が浸水したものの、現在と比べて浸水深はさほど高くはありませんでした。これは現在に

至るまでの治水対策工事の弊害ともいえます。

今回展示した資料に描かれた様子を見て、昔と今の「洪水の違い」を見比べてみると、また新たな発見があるかもしれません。

（学芸グループ 羽田武朗）



展示風景

開催案内

かわせみ河原とかわはくの鳥類

当館は荒川本流に面して立地し、住宅地や商業地にも隣接していますが、周囲では様々な生きものを観察することができます。また、当館の目の前には“かわせみ河原”と呼ばれる荒川の広い河川敷があり、キャンプ場として利用されています。こちらでも四季折々の生きものがみられます。

本展示では、おもに鳥類に注目し、当館やかわせみ河原でみられる種を写真で紹介しました。年間を通じてみられるハクセキレイやセグロセキレイのほか、ゴロゴロとした石の河原に、小石によく似た卵を産んで繁殖するイカルチドリ、ヨシ原で繁殖するオオヨシキリなどを紹介しました。また、上空を飛来するタカの仲間である、ノスリやハヤブサなども紹介しました。

本展示ではパネル展示だけでなく、バードストライク（建物などに野鳥が衝突する事故）で死亡した小鳥を活用し、仮はく製標本（研究用のコンパクトな形に仕上げたはく製）や翼標本、羽根標

本などを製作し、展示しました。鳥の羽根の色や形を間近で観察してみると、その美しさや、飛行・保温に対する高い機能性を感じることができます。

さらに、近年かわせみ河原や当館周辺にも出没するようになったニホンジカやアライグマなどの頭骨標本なども併せて展示しています。これらの標本は、麻布大学「いのちの博物館」で活動を行っている学生サークル、ミュゼットのご協力を得ています。

（学芸グループ 藤田宏之）



展示風景の一部



開催予告

春期企画展「麦の国さいたま」

開催期間：2025年2月8日（土）～5月6日（火・祝）

埼玉県は「うどん県」と言われるほど、うどんの消費量が多いようです。「和風めん」の出荷額は全国1位（2022年）、小麦の収穫量は全国8位（2023年、いずれも政府統計データ）でした。

荒川と利根川沿いに広がる低地や台地で栽培されてきた麦を製粉するために水車も利用されました。本展示では、麦の栽培とその歴史、麦翁と呼ばれた権田愛三、麦にまつわる民俗行事、麦からつくる食品、麦わら細工や麦わら帽子といった食品以外に使われる麦など、様々な角度から「麦」を紹介します。

展示内容

●麦栽培

麦の品種、播種から収穫までの栽培や製粉の様子、昔と今、麦の産地など、麦のイロハを写真や実物とともに解説します。

●麦翁とよばれた権田愛三

明治時代から大正時代にかけて麦作技術の改良と普及に力を尽くした熊谷市出身の老農、権田愛三のもとには、その技術を学ぼうとする人が日本全国から集まりました。権田が明治20年代から付けていたノートなどの各種資料から、当時の農業技術の改良と普及がいかに進められていったかを探っていきます。

●麦栽培に使われた民具

権田が開発した麦作技術の一つに、土入れがあります。土入れは麦の茎が増えすぎるのを抑えたり、倒れたりするのを防止するため株元に土をふりかける作業です。土入れには、フリコミジョレンという道具を使用します。フリコミジョレンは、土質や時代によって、形状が変化します。県内各地で使われていたフリコミジョレンを集めることで、その開発と改良の歴史を読み解いていきます。

●痩せた大宮台地を麦の産地に！ドロツケとは

火山灰からできた痩せた土地に、低地の肥沃な土を客土する（土を運び入れる）ドロツケという伝統農法によって、大宮台地は麦の一大産地となりました。土壌標本とともに紹介します。

●麦にまつわる民俗行事

麦の収穫を終えた夏には、麦にまつわる民俗行事がいろいろとおこなわれています。小麦飯を神饌（神様の食事）として供えるものや、素材として麦藁を使用するものなど、行事によってその性格は様々です。民俗行事の様相から、民俗社会において麦はどのような性格を持つ作物だったのかを見ていきます。



麦藁で作る脚折雨乞の龍蛇（2016年撮影）

●麦製品いろいろ

麦は様々な食品に姿を変えます。うどんなどの麺類はもちろん、小麦を使ったお菓子や、大麦を原材料とする麦茶、ビール、ウィスキーなどなど。また、産地として有名だった比企郡小川町のそうめんについても紹介します。食品ではない麦の利用として、麦細工、麦わら帽子なども紹介します。



秩父で栽培される大麦
（提供：ベンチャーウィスキー）

また、関連イベントは下記を予定しています。日程は追ってホームページ等でお知らせします！

◎講演会「麦翁 権田愛三（仮）」

◎ドロツケの歴史を学ぶウォーキング

◎展示解説

（学芸グループ 森圭子・矢嶋正幸）



お知らせ

かわはくオリジナルグッズを販売しています

かわはくオリジナルグッズの制作

かねてよりミュージアムグッズ販売の要望がありました。そこで今年度、新たなグッズの制作に取り組み、7月頃から徐々に販売を開始しています。ここでは一部を紹介します。

○タオルハンカチ

5色展開の今治タオルに、当館のシンボルである大水車の刺繍を施しました。

○大水車の木製キーホルダー

飯能地域の西川材（ヒノキ）で作られている大水車に関連づけて、比企郡小川町のヒノキに大水車の絵柄を焼き付けました。

○大水車クッキー

大型のクッキーに大水車をスタンプしました。

○竹笠

「川博」と大きく手書き文字が入ったオリジナル竹笠。常設展示室の荷船や鉄砲堰の解説時にスタッフがかぶっているものと同じです。船頭気分を味わえるだけでなく、風通しのいい日除けグッズとしてもおすすめです。

○特別展「自然の“国宝”展」てぬぐい

今年の特別展に関連して制作した、埼玉県天然記念物が大集合した絵柄の手ぬぐいです。寄居町にある染物屋「きぬのいえ」につくっていただきました。この手ぬぐいに限っては、郵送販売も行っています。郵送での購入をご希望の方は、ホームページの問い合わせフォームまたはお電話にてお問合せください。



○珪藻クリアファイル

水中の小さな生き物「珪藻」。珪藻のガラスの殻を並べてつくる珪藻アートの作家、奥修さんに制作していただいたスライドを顕微鏡で撮影してクリアファイルに仕立てました。川や湖など淡水産の珪藻を集めたものと、淡水・海水産を織り交ぜたものの2種制作しました。珪藻の名前がわかる解説書付きです。



この他にも、以前から販売しているカワシロウのぬいぐるみや、大水車Tシャツに加え、川にくらす生きもののぬいぐるみも販売しています。

書籍販売も始めました

当館学芸員が、執筆または監修した（一部執筆・監修も含む）書籍を販売しています。ぜひ、お手に取って内容もご覧ください。



冬期に向けて…

現在新たなグッズを鋭意制作中です。だよりが発行される頃には、販売開始予定です。当館にお越しの際には、お土産コーナーもチェックしてみてください。

（学芸グループ 三瓶ゆりか）



お知らせ

学芸員および研究活動紹介コーナーを新設しました

今年8月より、常設展示室の1階とリバーホールをつなぐ廊下（通称：フューチャートンネル）の壁側に「かわはく学芸員紹介」と「かわはく学芸員の活動報告」コーナーを新設しました。当館の学芸グループには、様々な分野の知識を持つ6名の学芸員が在籍し、研究・展示・教育普及などの幅広い活動に取り組んでいます。

「かわはく学芸員紹介」コーナーでは、それぞれの学芸員と館長が自分の専門分野や仕事内容のほか、荒川や当館のオススメポイントを紹介しています。「かわはく学芸員の活動報告」では、学会での研究発表（ポスター）や講演会の報告、出版物等の宣伝等をご覧になれます。こちらは最新の活動を紹介するコーナーですので、随時情報の追加や更新が行われる予定です。

毎月開催される「かわはく研究室」や「かわはく体験教室」、「かわはくであそぼう・まなぼう」などの各種イベントは、各学芸員が自身の専門を

活かして企画・実施をしています。

川に関する日頃の疑問や、研究課題や調べもののご相談なども受け付けておりますので、ぜひお気軽にお声がけください。また、本コーナーの他にも、出張授業のご案内やリニューアルした「かわはく岩石園マップ」もご覧いただけます。

（学芸グループ 板垣ひより）



フューチャートンネルのようす

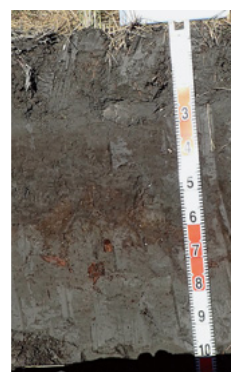
学芸員コラム

学会&巡検に参加してきました

10月12～13日に、新潟県胎内市において実施された日本ペドロロジー学会の大会と巡検に参加してきました。今回のテーマは「新潟県胎内川扇状地の老朽化水田と土壌改良」。初日は「イネごま葉枯病」というイネの収量を低下させてしまう病気が出やすいところと出にくいところはあるような土壌なのかを現場で観察し、翌日の公開シンポジウムでは、地元の農家さんも多数参加して、議論を行いました。

現場は飯豊山脈から流れ出る39kmの胎内川がつくる典型的な扇状地の上にあり、扇央と扇端の地点はそれぞれ病気が出やすい、出にくい水田です。より標高が高く、粒の粗い土砂が堆積する扇央地点は下層（40cm以下）が砂質で、水と共に養分が抜けてしまうような土壌でした（写真左）。一方、扇端地点の土壌は全体的により細粒質で、下層（50～60cmあたり）で枯死したヨシが出てくるなど水の影響が強く、水や養分がすぐに抜け

てしまうことはなさそうでした（写真右）。水の動きが土の化学的性質に影響し、病気の出る出ない



に関係すると予想されましたが、それだけでは病気の発生を説明できず、観察現場やシンポジウム場で様々な議論が交わされました。

土壌は、その土地の成り立ちや性質を知る重要な手がかりです。明瞭な答えが出ないこともありますが、その場の環境を知るための大切な情報を提供してくれます。そこに土の魅力や研究の必要性があると改めて感じました。

（学芸グループ 森圭子）



森玄黄斎作「蚕守護尊神」

10月6日まで開催していたスロープ展「今も残る養蚕習俗」に併せ、蔵出しコーナーでは、護符コレクターの松場正敏さんから提供していただいた養蚕の護符を展示しました。

展示していた護符の中に、二柱の神を脇に従え騎乗した男神を描いたものがあります（写真下）。展示スペースが限られていたため、詳しい解説ができていませんでしたから、このコラムを借りてどのような資料なのかを解説していきます。

図像両脇には、それぞれ「武西奈倉住 清浄園竹貫 謹寫并讃」「祭主 牧□純武貞」とありますが、清浄園竹貫とは、現在の秩父郡小鹿野町出身の彫刻家、森玄黄斎の雅号です。玄黄斎は、江戸後期から明治にかけて活動した彫刻家です。卓越した技巧で知られ、作品の中には、文化財指定を受けているものもあります。三峰神社が所蔵する「三峰山」の版木も、彼の手によるものです。

「蚕守護尊神」と上部中央に書かれていますが、尊像は鎮宅霊符尊になったものです。鎮宅霊符尊は、妙見信仰と習合され、北方を象徴する亀に

乗った姿で描かれることが多いのですが、ここでは騎乗姿です。それはウマガ、カイコの守護神とみなされていたためでしょう。牧□純武貞がどのような人物かは不明ですが、在地の宗教者とみて良いでしょう。奈倉には、妙見宮がありますから、その関係者だった可能性もあります。

上部には、讃として10首の歌が載っています。

- ①あら玉のみ玉の数も十六のまゆの玉ものかさるめでたさ
- ②六津の根のきよきこかけの初午にのり来る神の家そめてたき
- ③いち富士やにたかのはねに拂おろし桑の芽の露にそたつ毛ふるひ
- ④睦ましく家の賑ふしるしにやししならひより揃ふめてたさ
- ⑤わらかき御国の名ある桑の葉にいとよく揃ふたけのみことさ
- ⑥あおくとみとりの桑の枝ごとにさもいさましくのほるふなはし
- ⑦おもしろくすすむにわこのいみしさに皆睦しかせく見事さ
- ⑧十ふんにあまるかいこをけふあけてあすはこまゆの玉ものとなる
- ⑨しろ妙への糸すしきよきまゆ棚の光り賑ふ家の目出たさ
- ⑩明ほのゝころよりきよくおるはたのまとはせとふすあやの糸すし

①では小正月の、②では初午での蚕繁盛を願う儀礼の目出度さを詠んでいます。③から⑦では、鷹羽を使った掃きおろし（卵からかえったカイコを移す作業）から始まり、順にシシ・タカ・フナ・ニワと呼ばれる四回の休眠を挟んでカイコが成長する様を詠み込んでいます。⑧では、ついに育った繭の収穫を、⑨では製糸の、⑩では機織りのことを描いています。どれも順調な養蚕を願うもので、祝歌のような性格を持っています。

森玄黄斎と交流のあった彫刻家、持田鹿之助（秩父郡井戸村住）は、明治13年2月9日、近隣の人から依頼され、「掛巻母蠶の神を祈りなば恵茂厚き新玉のまゆ」の歌と「キヌカサ大神ノ姿」を彫った版木を作成し、護符を刷っています。

幕末から明治にかけての秩父地方では、蚕神と祝歌を合わせた護符を作成する文化があったようです。おそらくは小正月や初午などで飾ったものと思われるのですが、聞き取りなどによって、その使用実態について明らかにしたいものです。

（学芸グループ 矢嶋正幸）



12月

9/21/土～12/1/日

荒川放水路通水100周年記念展示
「東京をまもった人工水路と生きものたち」

7/土

かわはくであそぼう・まなぼう「土でアート作品づくり」
時間：13:30～15:30
内容：12月5日の「世界土壌デー」を記念して土の色を活かした作品を作ります。

観望会～かわはくの夜空を見上げてみよう～

時間：16:30～18:30

費用：500円

定員：30名

内容：寄居在住のアマチュア天文家に教わる星空観察会です。

8/日

かわはく体験教室「リースづくり」

時間：13:30～15:30

費用：300円

定員：8組

内容：木の実をつかったリースを作ります。

15/日

かわはく研究室「漁具のいろいろ」

時間：13:30～15:30

内容：魚の習性を利用した様々な漁具を紹介します。

27/金

モノづくりを楽しみながら学ぶ「ミニ門松づくり」

時間：①10:30～12:00 ②12:30～14:00 ③14:00～15:30

費用：3,500円

定員：各回10名

内容：かわはくの竹を使って小さな門松を作ります。

2025

1月

1/4/土～1/19/日

連携展「荒川国画コンクール」

4/土

かわはくで季節を楽しむ「干支飾り作り～羊毛フェルトで蛇をつくる!～」

時間：①10:30～ ②13:00～

費用：1,500円

定員：各回12名

内容：2025年の干支「蛇」を羊毛フェルトで作ります。

5/日

かわはくであそぼう・まなぼう「お正月あそび」

時間：①10:00～12:00 ②13:00～15:00

内容：昔ながらのお正月あそびが体験できます。

かわはくで季節を楽しむ「願いをかなえて!カワシロウ達磨をつくる!」

時間：①11:00～ ②13:30～

費用：1,500円

定員：各回12名

内容：手漉き和紙を使って、張り子のダルマを作ります。

11/土

かわはく体験教室「ペーパークラフトで珪藻をつくらう」

時間：①10:00～11:30 ②13:30～15:00

費用：200円

定員：各回15名

内容：珪藻を顕微鏡で観察し、ペーパークラフトを組み立てます。

19/日

かわはく研究室「顕微鏡で見てみよう」

時間：13:30～15:30

内容：水の中の小さな生きものを顕微鏡で観察します。

かわはくで季節を楽しむ「水引でしおりをつくら!」

時間：①10:30～ ②13:00～

費用：1,500円

定員：各回12名

内容：水引を使ったしおりを作ります。

2月

2/8/土～5/6/火祝

春期企画展「麦の国さいたま」

2/日

かわはくであそぼう・まなぼう「かわはくでまめまき」

時間：①11:00～ ②14:00～

内容：ワークショップでマスをつくり、リバーホールで豆まきします。

8/土

かわはく体験教室「葉脈でしおりづくり」

時間：13:30～15:30

費用：200円

定員：15名

内容：葉脈をラミネートしてしおりにします。

9/日

モノづくりを楽しみながら学ぶ「電気動くモノづくり」

水車っぽい歩くロボットづくり」

時間：①10:30～ ②13:30～

費用：1,500円

定員：各回12名

内容：水車をモチーフにした歩くロボットを作ります。

11/火・祝

かわはくで季節を楽しむ「大水車の木材でお名前プレートをつくら!」

時間：①10:30～ ②13:00～

費用：1,500円

定員：各回12名

内容：ヒノキの板に、ソフト粘土でつくった名前を貼り付けてプレートを作ります。

16/日

かわはく研究室「アオカビを観察しよう」

時間：13:30～15:30

内容：パンやミカンに生えるアオカビを顕微鏡で観察します。

3月

22/土

かわはく体験教室「廃油キャンドル」

時間：13:30～15:30

費用：200円

定員：10名

内容：廃油をリサイクルしてキャンドルを作ります。

30/日

かわはくであそぼう・まなぼう「桜のスタンプラリー」

時間：13:30～15:30

内容：園内の桜を巡ってスタンプラリーをします。

16/日

かわはく研究室「石造物を見てみよう」

時間：①13:30～ ②14:30～

費用：100円（保険料）

定員：各回10名

内容：かわはく周辺の石碑や石仏を巡り、その見方を解説します。

29/土

荒川ゼミナール「新河岸川を歩く4」

時間：9:30～15:30（予定）

費用：300円（保険料）

定員：20名

内容：川越市内の土地の高低差と段丘崖沿いの湧水を見学します。

ホームページでも紹介しています!

<https://www.river-museum.jp>

【お願い】①イベントは諸事情により変更になることもあります。ご了承下さい。②印のついた行事は事前申し込みが必要です。費用に「保険料」が含まれるイベントの申込締切日は、各イベント開催日の2日前までです。③定員になり次第締め切ります。

編集・発行

埼玉県立川の博物館



〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地
TEL/048-581-8739 (学芸グループ) FAX/048-581-7332
ホームページのフォームからお問い合わせいただけます。
<https://www.river-museum.jp>または「かわはく」で検索
X (旧Twitter) でもイベントの配信を行っています。
かわはく HP トップページQRコードはこちら →



2024年11月30日発行